

「夜 桜」

一本の杭に昂る黒揚羽

黒沢 孝子

泣き顔のやうに打上花火果つ

新涼やひとつ仕上がる竹の筧

雪吊のままに白梅匂ひけり

蔓引けば懺悔のごとく露どつと

ふらここに揺らす胎児や海光る

露けしや鴉の嘴に光るもの

出帆の銅鑼や俄に春吹雪

桃の皮みづから衣を脱ぐごとく

初桜をみなにはつか喉仏

頭髮は最後に死ぬるつくつくし

夜桜の先へ先へと白狐かな

秋冷の灯絶やさずかりもがり

緬羊を集める笛や山桜

ひと日死をひと日桔梗を思ひたる

しやぼん玉吹けば抜けゆくさみしさよ

火の山の噴きたり葡萄食べ頃に

五月来る瞑りて亀のはかりごと

子の消えし海へ桜の返り咲き

地に還す骨に仄かな紅薄暑

初鴨や秤の上の赤ん坊

はんざぎの孵化してさうな月夜かな

一遍のごとく向日葵立ち枯るる

明日競ふ馬の昂りハケ岳は夏

初神楽その夜狐と遊ぶ夢

梅雨山河棺に入るるパスポート

どんど焼船酔ひしたる心もち

噴水の撃たれしごとく崩れけり

晚餐や氷柱の中のレストラン